# ギフト

谷山　結子

朝、出勤すると部長がいた。オフィスの一番奥で、うつむき加減に座っている。一瞬、時間を間違えたのかと思い、みのりは腕時計を見た。始業三十分前。合っている。いつもの出勤時間だ。

その場につっ立っていると、入り口に近い席の男性社員と目が合い、慌てて中に入った。朝から忙しい営業部員の邪魔をしてはいけない。スイングドアが後ろでパタンと閉まる。

手前が営業職、奥が事務職のエリアになっているオフィスは、手前の半分だけが活気づいている。始業と同時に外に出ていく営業職にとって、この時間は、ほぼ全員の顔がそろう貴重な機会なのだ。

男性社員たちの言葉が飛び交うエリアを横目に、奥に向かう。

営業職と違って、事務職はみな九時前に出社してくる。この時間、事務職でオフィスにいるのは自分だけ。一人だと仕事がはかどる。新卒で入社して以来、ずっと続けている習慣だ。もうすぐ八年になる。

部長に先を越されるなんて初めてのことだ。何かあったのだろうか。おはようございます、と声をかけても、部長は無反応だった。

パソコンの電源を入れて席につく。気を取り直して仕事に集中しようと思ったとたん「細川さん」と呼ばれた。反射的に顔をあげると部長と目が合う。

はい、と応えて席を立った時、めまいがした。やはり体調が思わしくない。こんなことなら早く来るんじゃなかったと後悔する。

部長の机の横に立つと、部長はキャスター付きの椅子を回してこちらを向き、大きな白い封筒を差し出した。受け取って中を確かめる。近日中に新規オープンする有料老人ホームのパンフレットだった。みのりが作成を手がけたものだ。

高水準、高価格の老人ホームにふさわしいものをという指示で、高級感を出すために紙質や色合いをどうするか、印刷会社の担当者と何度も打ち合わせをし、数か月をかけて完成させた自信作だ。

「中を見てみろ」

普段は温厚な部長が命令口調になるのは、すこぶる機嫌が悪い証拠だ。

パンフレットを一枚ずつめくる。中綴じの見開きには、Ａ４サイズのチラシが何枚か挟まれている。料金表、献立表など別刷りのチラシだ。これらも紙やデザインを吟味した。

「何か気がつかないか」

「え？」
「ひとつ足りないものがあるだろう」
改めてパンフレットに視線を落とす。
「担当者なのに気づかないのか」
そんなこと言われたって。手のひらが汗ばむ。部長は椅子を回して机の方に向き直り、
「社長の挨拶文だ」
と言った。
「昨日の内覧会で配布したパンフレットに、社長の挨拶文が入っていなかった。しかも、気づいたのは社長ご自身だ」
部長の横顔が怒っている。
半年前、営業部にやって来た社長の顔が脳裏によみがえった。父親の後を継いで、社長に就任したばかりの頃だ。あの時の社長も険しい顔をしていたが、あれは怒っているのではなく、威厳を保つためだ。
長らく副社長として会社を取り仕切り、社内のことは誰よりも熟知しているはずなのに、今さら全ての部門を視察するのは、自分が社長だということを周知徹底するために違いないと社員たちは噂した。
副社長だった時代には、父親が事業拡大のために重ねた借金を清算し、堅実な経営に転換させた実績のある人物だ。なので、二代目社長に就任してすぐ、高級志向の有料老人ホーム開設の計画が発表された時は、意外な気がした。部長クラスには前々から知らされていたらしい。
部長が言うには、二代目は数年前から、当時の社長だった父親に提案し続けていたそうだ。何度もはねかえされたのち、もうすぐお前の代になるのだから思うとおりやってみろ、と、ようやくゴーサインが出たのが三年前。そこから着々と準備を進めてきたという。
あの慎重な二代目社長が莫大な借金をしてまで押し進める事業ということは、よほど勝算があるのだろう、と部長は話していた。これは営業部にとっても大きな仕事になる、と。
そのパンフレット作成を担当したのがみのりだ。ターゲットは富裕層。これまでの低価格、誰でも入れる施設というコンセプトから路線変更し、介護スタッフを手厚く配置し、看護師を二十四時間常駐させ、コンシェルジュも置く。入居金だけで数百万円もする高級老人ホームだ。パンフレットの作成についても、今まではコスト抑制が最重要課題だったが、今回は予算を気にしなくてよいということで大いに奮起した。
部長が担当に指名したのは、みのりと他にもう一人。
「ミスの原因を突き止めて、午前中に報告するように」

背広の胸ポケットに入れたタバコに手をかけながら、部長は席を立った。
いつの間にか事務職のほぼ全員が出勤していた。席に戻って向かいの机に目をやる。寺田はまだ出社していない。八時五十五分。始業五分前だ。みのりと一緒にパンフレット作成を担当した寺田は、事務職では唯一の男性社員だ。
新卒一年目のくせに、寺田はいつも九時ぎりぎりに出社してくる。しかも席につくなり、通勤途中で買ったらしい菓子パンやヨーグルトを食べ出すのだ。先輩社員たちが九時前にかかってくる電話に対応したり、仕事のメールをチェックしたりしているのに、いったいどういう神経をしているのか。
いつだったか見るに見かねて注意すると、寺田は「九時には間に合っているじゃないですか」と口を尖らせた。新人の思わぬ反応に驚いたが、ここは寺田のためにも言ってやらねばと思い、食べ物を口にしていたら、かかってきた電話も取れないでしょ、と諭すと、「じゃあ九時前に仕事した分、残業代をつけていいですか」ときた。
みのりは寺田の教育係でもあるのだが、自分がその役割を果たせているのかどうか、自信はない。
教育係に指名した理由について、部長は年齢が最も近いからだと説明した。しかし、もうじき三十になるみのりは、寺田とは七つも年が離れている。年齢を口実に、体(てい)よく厄介者を押しつけられたとしか思えない。
それに、寺田の面倒をみるのが一年近くに及ぶとは思ってもいなかった。
主(ぬし)が不在の机をながめて、みのりはため息をついた。
「寺田くんはまだ来ていないのか」
突然、頭上から声がして飛び上がりそうになった。真横に部長が立っている。タバコを吸いに行ったのではなかったのか。
「とりあえず細川くんが把握している範囲でいいから、経過を説明してくれ」
あと二、三分もすれば寺田が来る。そんなわずかな時間すら待てないほど、事態がせっぱつまっているということか。これは、自分もただではすまないという気がしてきた。
部長にうながされてオフィスの一部をパーテーションで仕切ったスペースに入り、ソファセットに向き合って座る。
最初に社長の挨拶文の原本を部長から受け取ったのは自分だ。一枚刷りにしてパンフレットに挟むようにという指示だった。Ａ４の紙に万年筆でしたためられた社長の字は、恐ろしく達筆だった。
寺田に見せると、じゃあ部数をコピーします、と席を立ち、すぐ後ろのコピー機に向かうので、みのりは慌てた。
「ちょっと、ちょっと。私の話、聞いてた？」
「はい？」

コピー機の上部のふたを開けながら、寺田が振り返った。
「そんなペラペラの普通の紙じゃなくて、上等の紙に印刷するようにって部長から言われているのよ。さっき言ったでしょ。なんたって社長の直筆の挨拶文なんだから」
「はあ」
「ほら、見てよ、この万年筆のインクの濃淡。これを印刷でそっくり再現しなくちゃいけないの。つまりプロに任せる仕事ってわけ」
そして寺田に、出入りの印刷会社にすぐ連絡するよう伝えたのだ。
担当者の尾西は、その日のうちにやってきた。
「ものすごくきれいな字ですね」
今、みのりと部長が座っているソファセットのテーブルに置かれた社長の挨拶文を見て、尾西は感心したように言った。
「ええ、社長は幼い頃からペン字を習っていたそうです。字が汚い奴に仕事のできる人間はいないって、先代の社長から散々言われて育ったとか」
「なるほど」
尾西がうなずく。
「戦後すぐに何もないところから事業を立ち上げて、会社をここまで大きくした人の言葉は重みがありますね」
「今はパソコンもメールもあるから、先代の言葉は時代遅れかもしれないですけど」
みのりが言うと、尾西は「いやいや、大事なことです」と首を振った。
「うちは今でもＦＡＸで注文が来ますけど、字が汚くて判読に苦労することもありますから。きれいな字で書かれた注文書が来たら、それだけで発注元に良い印象を持ちますね」
営業マンらしく、尾西は明朗快活に話す。
「ところで、この原本はお借りできますか？」
「いえ、原本は持ち出し禁止なんです。部長にかたく言われていまして。すみません」
「そうですか……。それなら、この挨拶文をスキャンしてデータで保存させていただきたいんですが。たしか、こちらではスキャンできないんでしたよね」
うちの印刷コピー機にはスキャン機能がついておらず、ハンディタイプのスキャナーもない。少し考えて、寺田を呼んだ。
「寺田くん、原本を尾西さんの会社に持参して、その場でスキャンしてもらってから、すぐまた原本を持って帰ってきてくれる？」
事情を説明すると、「別にいいですけど」と口を尖らす。寺田のこういう顔は見飽きたな、と思う。
「そんな面倒なことをするより、スキャナーを買えばいいじゃないですか。あんなもの、数千円も出せば買えますよ」

「備品の購入には部長の許可がいるのよ。それに、スキャンなんて、普段はほとんど使わない機能だし。その金額に見合うだけのものなのかどうか、よく考えないと」
すると、寺田はますます不服そうな顔をした。
「僕が尾西さんの所に行って帰ってくる時間を時給に換算したら、スキャンの機械を買える額を余裕で超えますよ。それだけでも費用対効果は抜群じゃないっすか」
ああ言えばこう言う。あんたの仕事なんて時給０円に等しいんだよ、この給料泥棒が、という言葉をかろうじて呑みこむ。
寺田が退出すると同時に、みのりは尾西に頭を下げた。

「それからどうした？」
部長が身を乗り出す。
「分かりません」
「分かりませんじゃないだろう」
腕時計を確かめると、九時を回っていた。「寺田くんを呼んできます」と席を立ち、パーテーションから出る時に、また立ちくらみを覚えた。
寺田を横に座らせ、再び部長と向かい合う。
「原本はどうしたんだ」
部長が寺田に聞いた。
「分かりません」
「分かりませんじゃないだろう」
さっきと会話が同じだ。自分まで無能な人間に思えてくる。
それにしても、と胸のうちでつぶやく。寺田は覚えていないのだろうか。いや、自分の記憶違いかもしれない。両手を握りしめると下腹部に痛みが走った。
「尾西さんに返してもらってから、放置していたんじゃないのか」
寺田が顔を上げた。
「実はさっき、尾西さんに電話したんだ」
部長が寺田をまっすぐ見返す。
「寺田くんから原本を預かって、後日、返したと彼は言っている」
「でも、僕のところにはありません」
寺田が反論した。
「尾西さんは返したと言っているぞ」
「僕のところにはありません。だから、返してもらっていないと思います」
「返してもらったあと、自分が紛失したかもしれないとは考えないのか？」
それは十分ありえる。寺田の机の上はいつも書類が山積みになっているのだ。いくら注意しても改善しない。

「まずは机の上を整理してから言うんだな」
部長が立ち上がり、パーテーションの横から出て行った。
「え？　どういうことですか？」
寺田が戸惑った顔でみのりを見た。
「話は終わりってことで、いいんですかね」
「書類を整理しろって、今、部長がおっしゃったでしょ」
「それはもちろん、しますけど」
寺田が大げさにうなずく。うそをつけ。
「じゃあ、しなさいよ。今すぐに」
「あ、午前中は僕、別件が入っていまして。午後からします。はい、必ず」
「私は午前中に部長に報告しなくちゃいけないのよ」
「はあ」
「ということは、今すぐしないとダメでしょ」
「はあ」
沈黙。
「書類の整理って苦手なんすよ、僕」
「このばかもんが！」
みのりが口を開く前に、パーテーションの横から現れた部長の雷が落ちた。
「挨拶文の原本をさがせと言っているのが分からんのか」
ぽかんと部長を見つめる寺田を残して自分の席に戻る。大変だねえ、という同僚たちの目配せに肩をすくめてみせた。
しばらくして向かいの席に寺田が戻ってきた。横で部長が腕を組んで仁王立ちだ。机の書類を一枚ずつ右の山から左の山に移動させるので、また部長から怒られている。
社長の挨拶文は出てこなかったが、別の書類が次々と出てきた。そのたびに「あ、その資料！」「ずっと探していたのに」「なんでここにあるのよ」と女性社員たちの甲高い声が飛ぶ。
「もういい！」
部長がはき捨てるように言って立ち去ると、寺田はやれやれというふうに片付けの手を止めた。すかさず寺田に告げる。
「念のために言っておくけど、もういいっていうのは、もう社長の書類をさがさなくていいっていうことじゃないからね」
「え、そうなんですか」
また間抜けなことを言う。
「僕、午前中はいろいろ忙しくて」
まだ言うか。

「いろいろって？」
キレそうになるのをどうにかこらえて聞く。予想通り、どれもたいした用ではなかった。
「とにかく机の上の書類を確認するのよ」
部長がこちらの様子を見ている。寺田の机に回りこみ、「私が右の山を引き受けるから、寺田くんは左の山を確認して」と、部長に聞こえるように指示した。
結局、社長の挨拶文は出てこなかった。寺田はきれいに片付いた机をながめ、ひとり悦に入っている。
「机の上ってこんなに広いんですね。これならパソコン作業もしやすいや」
バカじゃなかろうか。もう注意する気力も失せていた。
書類がキーボードに当たって勝手に操作されたりして大変だったんですよ、と笑う寺田を無視して自分の席に戻った。
ずっと引っかかっていることがあった。印刷会社の尾西に電話をかける。
「先ほど部長さんにもお伝えしましたが、原本をお返ししたのは確かです」
と、尾西は言った。印刷会社でスキャンして（寺田はその場で待たずに、預けて帰ったらしい）、数日後、紙のサンプルと一緒に営業事務所に持参したという。その日付けと時刻まで尾西は明快に答えた。
「寺田が直接、受け取ったわけではないんですね？」
「ええ。寺田さんは電話中で、別の社員さんが代わりに受け取ってくれました。でも、その社員さんが机に置いとくね、と言って寺田さんの机に置くのを寺田さんも見ていて、受話器を耳に当てたままでうなずいておられましたよ」
電話中というのが気になる。一度に二つのことができない寺田のことだ。電話に気を取られ、書類のことが頭からすっぽり抜けてしまったのではないか。
「ただ、その場に部長さんもおられたんです」
電話の向こうで尾西が声のトーンを落とした。
「その時、部長さんが僕に、挨拶文の内容を差し替えるかもしれないので、印刷は待ってほしいっておっしゃったんです」
やっぱりそうか。聞きたかったのは、そのことだ。
「ちょうど電話を終えた寺田さんにも、部長さんはそう話しておられました」
「尾西さん、そのこと、さっきの電話で部長に言いました？」
「いえ」
尾西が初めて言葉を濁した。
「何となく言いづらくて。実は、パンフレットに挨拶文を挟むこと自体、先ほどの部長さんからの電話で僕は初めて知ったんです。印刷を待ってほしいと言われて以後、最終的にどうするのか、そちらから何も聞かされていませんでしたし。でも、それを

言える雰囲気ではありませんでした。部長さん、寺田さんのことをすごく怒っておられて」

電話を切ったあと、再び記憶をたどる。

挨拶文の印刷保留の話は、みのりも部長から聞かされた気がしていた。そのおぼろげな記憶が、今の尾西の話で徐々にはっきりしてきた。社長のゴーサインが出るまで印刷を待つようにと部長から言われたこと、それを寺田に伝えた時に「さっき部長からも聞きましたよ」と寺田が言ったこと、そのめんどくさそうな言い方にイライラさせられたこと――それらのことが芋づる式に思い出される。

となると、みのりが部長から印刷保留の件を聞いたのは、尾西が原本を返しに来たのと同じ日ということになる。日報ファイルを取り出し、二か月前、尾西が原本を返しに来たという日の日報を当たる。

日報には、出退勤の時間、業務内容などを記入するほか、健康チェック欄にその日の体調を五段階で記入する決まりになっている。会社が社員のメンタルヘルスに気を配っていることを示すための形式的なものであるが。

その日は、五段階で最下位の「体調が非常に良くない」にチェックが入り、その理由として「生理中」と書いてあった。その翌日の日報を見ると、下から二番目の「体調が良くない」、理由はやはり「生理中」、備考欄には「部長、今日から〇〇日までリフレッシュ休暇」とあった。そうだ、この月は勤続三十年のリフレッシュ休暇で部長が十日間の休みを取っていたのだ。「いいっすよね、ヨーロッパ旅行。僕なんか十日間の休みをもらっても、金がないから旅行なんてできませんよ」と寺田が言っていたことを思い出す。尾西が原本を返しに来た翌日から、部長は十日間――土日を含めると十四日間の休暇に入ったのだ。

その期間の日報を確認すると、自分の字が乱れていた。体調が悪かったのと、部長の不在により仕事量が増えたせいだろう。退勤時間も二二時台、二三時台が続いている。社長の挨拶文のことが自分の頭の中の「やるべきリスト」から外れてしまったとしても無理はない。そう自分に言い聞かせる。

言い逃れをするつもりはない。持ち出し禁止の原本を尾西に預けた寺田にも落ち度はあるが、後日、知らず知らずのうちに原本を取り込んでしまった自分には、さらに責任がある。

では、部長はどうなのか。

部長の「印刷は待ってくれ」というひと言によって、みのりや尾西の挨拶文への意識が薄れたのは間違いない。印刷の保留が解除されたのなら、そう言うべきだ。時差ボケか休みボケか知らないが、長い休暇の間に、部長の頭から抜け落ちたのだろう。

おそらく部長は、この事態を招いた一因が自分にあるとは思っていない。たとえ追及しても、差し替えるかもしれないと言っただけで、挨拶文の掲載を止めるとは言っ

ていないだろう、と一蹴されることは目に見えている。
向かいの寺田の様子をうかがう。何事もなかったように、自分の机のパソコン画面を見つめている。全く、能天気な人間はうらやましい。
寺田が部長に反旗をひるがえすシーンを想像してみる。（そんなこと言ったって、挨拶文の印刷を保留にしたのは部長じゃないっすか）（僕らを責める前に、ご自分の胸に手を当ててみたらどうですか）とかなんとか。
空気を読まないという得意技をいかして部長に物申してもらいたいところだが、印刷保留の話を聞いたこと自体、寺田は覚えていないだろう。止め止め。バカらしい。
とにかく報告は上げなければならない。机の下の引き出しから報告書の様式が入ったファイルを取り出そうとした時、藤色の封筒があるのに気づいた。この色は尾西の会社の封筒だ。取り出してみると、面には「紙のサンプル」の文字。先ほど尾西が言っていた封筒だ。クリアファイルに入った数枚の紙が出てきた。付せんがついている。
――細川様、寺田様　　ご検討のほど、よろしくお願いいたします。　　尾西
一枚ずつ、めくっていく。どれも淡い色合いの上質な紙だ。手ざわりはなめらかだったり、かすかにざらついていたり。柄もさまざまで、透かしが入ったもの、空と雲の模様、格子模様など、どれを採用するか悩むほどに美しい。
一番下の紙を目にしたとたん、視界がすっと暗くなった気がした。社長の挨拶文だった。ひと呼吸して目を閉じ、また目を開ける。紙面をじっと見る。
万年筆のインクの濃淡、かすれ、にじみ。間違いない。これは原本だ。紙のサンプルと一緒に渡した、という尾西の言葉がよみがえる。封筒に入っていたとは、うかつだった。
そもそも、紙のサンプルを自分が持っていたことを、今の今まで忘れていた。「紙のサンプル」と書かれた藤色の封筒が寺田の机に置いてあったこと、こんなふうに置きっぱなしにしたら寺田はすぐに失くすに違いないと心配になったことが鮮やかによみがえる。中を見た覚えはない。後で見ようと自分の机に持ってきて、そのまま忘れていたのだろう。
しかし、尾西も尾西だ。これほど大事な書類を、「紙のサンプル」の封筒に一緒に入れるなんて。いや、直接返しに来るぐらいだから、対応した社員に尾西は伝えたかもしれない。その社員から寺田に伝わらなかったのか、はたまた寺田が伝えられたことを忘れてしまったのか。
どれも推測の域を出ない。
はっきりしているのは、今、目の前に社長の挨拶文の原本があるということだ。
とりあえずコーヒーでも飲んで気持ちを落ち着けようと思い、オフィスを出て給湯室に行く。事務職の女性社員が数人、カップを片手に立ち話をしていた。
「あれ、細川さん、もうコーヒー飲めるんだ」

みのりがインスタントのドリップコーヒーをマグカップにセットするのを見て、社員の一人が話しかけてきた。
「うん、生理三日目でピークが過ぎたから、もう大丈夫かなと思って」
生理がひどい時はコーヒーや甘いものは極力控えている。みのりの言葉に、別の社員が大きくうなずいた。
「私も生理がきつい方だけど、ほんと大変だよね」
「大変と言えば、寺田の奴、朝からえらいことになっていたね」
「私が決裁で回していた書類もさ、僕は知りませんって言いはっていたくせに、さっき、あいつの机の書類の山から出てきたのよ。ほんと信じられない」
「私たちの書類はともかく、社長の直筆の文書をなくすのは、さすがにヤバくない？」
「そういえば、ついさっき、部長が上から呼び出されていたわ」
コーヒーを手に給湯室の壁にもたれていたみのりは、思わず顔をあげた。
「それって、いつ？」
「え？」
無表情に聞くみのりに、相手が少し怯んだのが分かった。
「部長が呼び出される日」
「……ああ、今日の午後じゃない？　内線で部長がそう答えていたから」
分かりきったことを聞いてしまった。今日に決まっている。
「その電話、私も近くにいたけど、部長、直立不動だったわよ」
別の社員が横から口をはさむ。
「部長、電話で何か言ってた？」
今度は表情を意識して聞くと、相手はほっとした顔になった。
「何だっけ。あ、そうそう、大事なものを紛失してしまってとか、新人のことですからとか、監督不行き届きでとか、そんな感じ。とにかく平謝り」
みのりは黙りこんだ。あとは他の社員で勝手に盛り上がる。
「社長にしたら、パンフレットに挨拶文を入れなかったこと以上に、自分が精魂こめて書き上げたものを軽く扱われたことが許せないんじゃない？」
「プライドが高くて神経質そうだもんね、あの社長」
「先代と比べられて、いろいろあるんじゃないの」
「今度の老人ホーム、すごいわよね。今までと全然違うもの。あんな高い料金を払って入居する人なんているの？」
「お金って、ある所にはあるのよ」
「昨日の内覧会もすごく盛況だったらしいわよ。用意したパンフレットの数が足りなくなるくらい」
「そのパンフレットに挨拶文が入っていなかったんだから。社長にしたら、地元の名

士とかお金持ちに自分を知ってもらう絶好の機会だったのに、そりゃ怒るって」
「挨拶文って、どんな内容なの？　自己紹介的な？」
「知らないわよ、そんなの。私に聞かないで」
「僕が新しい社長ですっていうアピールじゃないの。親父はもう引退しましたよって」
笑いがおこる。
みのりは黙ったまま、手にしたマグカップのコーヒーの渦を見つめていた。
「それにしても、今さら原本をさがしてどうなるの？」
「そりゃ、パンフレットに入れ忘れただけじゃなくて、原本まで紛失したとなったら、社長がどれだけ怒るか分かったもんじゃないわよ」
「今朝、九時前に、社長室から内線がかかってきたしね」
「え、社長室から？」
「すぐ部長に取り次いだから詳しいことは分からないけど、原本のことを聞かれたんじゃないかな。原本はもちろんございます、って部長が答えていたから」
ああ、それで部長はあんなに落ち着かなかったのか。寺田が出勤する前、みのりの机の横でそわそわしていた姿を思い出す。
「その原本が、ふたを開けたら、なかったというわけね」
「寺田のせいよ」
「だいたい、なんであいつ、うちの島にいるのよ」
同期入社の佐々木の声に、みのりは顔をあげた。
中途採用の佐々木はみのりより十五歳上だが、入社式で顔を合わせた時から気さくに話しかけてきてくれ、みのりもタメロで接している。前はヘルパーの仕事をしていたらしく、介護職の経験があり、事務処理能力にも長けている佐々木は、社内の介護部門からも頼りにされている。
「今朝だってさ、九時ぎりぎりに来て、さっそくパンを食べ出したじゃない？　そりゃ、私だって五分前に出社するから偉そうなことは言えないけど、席についたらすぐ仕事に取りかかるし。ところが寺田の奴ときたら、パンを食べている間に九時を回っても平気な顔してさ。自分のミスが原因で、細川さんがソファの部屋で部長に怒られているのも知らないで。あんまりだと思って、それで今朝は注意したわけ。そしたらあいつ、何て言ったと思う？　朝ごはんを食べないと体に悪いから、だって！　だったら家で食べて来いっつうの」
あんなのとペアを組まされるなんて細川さんが気の毒すぎるよ、と佐々木は鼻をふくらませた。いつもなら激しく同意するところだが、今日は、まともに顔を上げられない。
足元の床をぼんやりながめていると、一年近く前のことがよみがえった。
社内の事情通である佐々木によると、昨年の春、会社が経営する有料老人ホームの

土地の持ち主から、大学卒業を間近に控え、まだ就職先が決まらない親戚の若者を雇ってもらえないかと会社に持ちかけられ、採用したのが寺田だという。

会社の習わしとして、新人の男性社員はまず営業部に配属し、外回りで現場感覚を身につけさせる。ところが寺田は、先輩について回った営業先で初日から失礼な言動を連発し、一週間後には外回りから外された。そこで部長の判断により、いったん事務部門で預かることになったのだ。

部長は寺田の教育係にみのりを指名し、こう言った。ミスをやらかさないよう見守りつつ、しかるべき勤務態度と最低限の業務遂行能力を身につけさせ、せめて会社に害のない人間に育てろ、と。無茶な話である。おかげでみのりの仕事は倍になり、ストレスは溜まるわ、ミスは増えるわ、あげくの果てにこのざまだ。

今回の件については、悪いのは自分だ。寺田のせいではない。それは分かっている。

「あいつ、いつになったら営業に戻るわけ？」

佐々木のぼやきに笑い転げる同僚を尻目に給湯室を出た。

席に戻り、報告書の作成に取りかかる。原本が見つかったことをどう書くべきか。そのことで頭がいっぱいだった。これは始末書ものだ。いや、もっと重い処分が下るかもしれない。でも、正直に報告しなければ。そう思うのに、報告書を作成する手が止まる。いっこうに進まない。

とりあえず午後の会議の資料だけ準備しておこうと思い、向かいに座る寺田の横を通ってコピー機に向かう。通りすがりに何気なく寺田の机のパソコンに目をやると、フラッシュを浴びる若手女優の顔が大写しになっていた。

みのりが近づくことを予測していなかったのだろう。寺田がすばやく画面の右上をクリックしてサイトを閉じると同時に、会社のホームページのトップ画面が現れる。しかしパソコン画面の上の方には、仕事と関係のないサイトのタイトルが横にずらりと並んでいるのが容易に確認できた。

寺田の席は後ろが壁で、他の社員からパソコン画面をのぞかれにくい。それをいいことに、寺田はサボりたい放題にサボっているのだ。書類の片付けを終えてからパソコン画面を真剣な顔で見つめていたのは、これだったのか。机の上が片付いて、さぞかしパソコン操作がしやすくなったことだろう。突如として腹の底から怒りが湧きあがった。こんな奴のために私が悩むなんて――。

その時、寺田がコピー機の方を振り向いて言った。

「細川さん、ズボン汚れてますよ」

みのりはぎょっとして自分のズボンを見おろした。

「違います、後ろ、後ろ。お尻の方です」

さほど広くない事務所に響き渡るような声で寺田が言う。「ありがと」と、寺田に微笑んで黙らせると、書類でさりげなくお尻を隠しながらオフィスの出口に向かいかけ、

思い直して自分の席に取って返し、机の下に置いているカバンを肩に引っかけると、再び足早に出口に向かった。
トイレの個室に駆け込んでズボンを下ろす。生理用ナプキンの後ろ側にはみ出した血が、三日月のような形の細く赤い染みを作っていた。染みはショーツとパンストを通り抜け、ズボンまで達している。
ピークが過ぎたと思って油断した。さっき飲んだコーヒーのせいだろうか。それに今日は色の濃いズボンを穿いてきたので、万が一、血が漏れたとしても人に気づかれないだろうと高をくくっていた。便座に腰かけ、放心したようにトイレのドアを見つめる。
しばらくして我に返った。ズボンを何とかしなければ。巻き取ったトイレットペーパーに便座クリーナーの消毒液を振りかける。染み抜きの要領で、ズボンの赤い染みをトイレットペーパーでおさえて叩く。こすってしまうと逆効果だ。
ズボンに消毒液をなじませてふき取る作業を繰り返すうち、染みはほとんど目立たなくなった。同じようにショーツとパンストの染み抜きも済ませ、しばらく座って乾くのを待ってからトイレを出た。
何食わぬ顔で席につく。向かいの席から寺田が、大丈夫でした？ と声をかけてくる。大丈夫、と短く答えると、「トイレからなかなか戻って来ないから、具合でも悪いのかと心配しましたよ」と、これまた周りに聞こえるような声で言う。
（いいから、お前はもう黙れ）という念を込めて、みのりは寺田に微笑み返した。
その日の午後、机の引き出しから社長の挨拶文を取り出し、しばらく見つめてから、みのりはそれをシュレッダーにかけた。

「ねえねえ、みのりちゃん、もうそろそろ生理が終わる頃じゃない？」
恋人の達也が両手を組み合わせて声色を使い、目をきらきらさせて寄ってきた。
「知らない」
みのりはコタツでテレビのリモコンを操作しながら、ぶっきらぼうに答えた。
「あら、ご機嫌ななめ？ まだ生理のど真ん中かしら？」
達也は一オクターブ高い声を出し、大げさに驚いてみせた。
「今日、四日目」
「あれ、じゃあ、もうすぐじゃん」
達也が組んだ両手をほどいてガッツポーズをした。
年末年始をまたぐこの二か月というもの、飲食業界で働く達也は仕事が書き入れ時で、家には寝に帰るだけの生活が続いていた。忙しさがようやく落ちつき、久しぶりの夜を二人でゆっくりと……という時に、みのりの生理が始まったのだ。お預けを食らった犬のようだと達也はぼやいた。

付き合い始めて三年、一緒に暮らし始めて二年。実家の両親が、そろそろ結婚を、と言い出すようになっていた。ただ、両親には話していないが、達也はいわゆるフリーターだ。

「そういや尾西から聞いたけど、なんか会社で大変なんだって？」

コタツに入りながら、ついでのように達也が言う。

達也は尾西の前任者だ。三年前、印刷会社の飛び込み営業で達也が営業部のオフィスを訪ねて来た時、たまたま対応したのがみのりで、それが出会いだ。達也の自然な態度と誠実な対応に好感をもった。試しに介護施設の資料作成を頼んだところ、予想以上に出来映えが良く、部長や上の評価も上々だったため、少しずつ大口の注文をするようになった。印刷会社を退職する達也の後を引き継いだのが尾西だ。二人は同い年で気が合うらしく、今でも時々飲みに行ったりしている。

「尾西さん、何て？」

「いや、詳しいことは何も。みのりが大変そうだって、それだけ。あいつ、余計なことは言わないから。みのりの会社は尾西にとって大事な顧客だし。顧客の悪口になるようなことは、あいつは言わないよ」

俺の教育が良かったんかねえ、と達也はおどけてみせた。

コタツ板に片頬をつけ、横向きになって達也を見上げる。ふふ、と笑いが漏れる。

何だよ、と達也がつられて笑う。

何でもない、と笑って反対側を向く。

何だよ、もう、と言いながら、達也がみのりの後ろ髪をくしゃくしゃにする。

「こっち向けってば。な、みのり。みのりちゃん。おーい、聞こえてる？」

「やだ、向かない」

「何だよ、それ」

達也が笑う。

「頭、なでて」

「うん？」

「いい子、いい子ってするみたいに、頭、なでてよ」

はいはい、と達也がみのりの後頭部をなでる。大きな手だ。骨ばっている。職人の手だ。営業マンだった頃は柔らかい手だった。あの手で触れられることは、もうない。

達也が三十歳を目前にして会社を辞めたのは、料理人として自分の店をもちたいという夢を捨てきれなかったからだ。最初は和食の店に見習いで入り、その後、洋食、創作料理などの店を転々とし、今も修業中の身だ。達也は今年三十二になる。

みのりの両親には、達也は印刷会社の営業マンとして外を飛び回っていることにしている。定職についてほしい。それがみのりの願いだ。正直、料理人じゃなくてもいい。もちろん達也には言わないが、つい言ってしまいそうになる時がある。

顔を上げて、テレビのリモコンに手を伸ばす。
「会社に仕事のできない新人がいてさ。そいつの仕事のミスをカバーしなくちゃいけなくて、いろいろ大変なの。尾西さんにも迷惑かけちゃって」
一通りチャンネルを変えてから、テレビのリモコンを放り投げる。コタツ布団の上にリモコンがバフッと音を立てて着地した。
「あんまり悩みすぎるなよ。新人なんて、自分で頭打たないと分からないんだからさ」
うりゃっ元気だせ、と言いながら、達也はみのりの前髪をくしゃくしゃにした。

体調はほぼ回復した。明日は冬のバーゲンで買ったモスグリーンのスカートを穿いてこようと考えながら、オフィスビルの一階のエレベーターホールで待っていると、めずらしく佐々木と一緒になった。今日は早いね、と声をかけると、佐々木は、ねえ聞いた？ といきなり距離をつめてささやいた。
「何？」
つられて、みのりも声をひそめる。
「寺田のやつ、異動だって」
「え！」
「おととい、パンフレットの挨拶文の件でやらかしたでしょ。あれで、さすがの部長も堪忍袋の緒が切れたみたい。もう面倒を見きれませんって、上層部にかけ合ったのよ」
「誰から聞いたの、そんなこと」
「聞くも何も、丸聞こえだってば。昨日の昼休み、部長が自分の机で、上の人と内線で話をしていたのよ」
その時間、みのりはたまたま席を外していた。
「部長、すごい剣幕だったわよ。周りに社員がいるのに、全然おかまいなし。みんな、お箸を持つ手を止めて固まっていたもの。さすがに寺田は、その場にいなかったけど」
それを細川さんに話したくて早く出勤したの、と佐々木は目配せした。オフィスに入ると、今日も先に出社していた部長が待っていたように声をかけてきた。
「細川さん、ちょっと、いいかな」
部長のあとをついて行く。オフィスを出た長い廊下の突き当たりは、全面が大きな窓ガラスになっている。窓の外では冬枯れの街路樹が風に揺れている。窓のそばに立ち、しばらく外の景色を見つめていた部長は、寺田くんのことなんだけど、と切り出した。
「もう他の人から聞いて、細川さんも知っているかもしれないけど」
「はい……。寺田くん、異動するって聞きました」
そう応じると、部長はみのりを見た。

「異動？ 違うよ。彼、辞めることになったんだ」
「え……」
みのりは絶句した。
「今回のミスは、やっぱり大きかったしね。まあ、それだけじゃないんだけど。でも今回のことが退職のきっかけになったことは確かだ」
「辞めさせられる、ということですか」
耳に膜がかかったように、自分の声が遠くに聞こえる。
「辞めさせるというと語弊があるけど、まあ実質、そういうことになるね。形は自己都合ということになるけども」
部長によると、寺田のことは今までも上に報告していて、箸にも棒にもかからない人間だということは向こうも認識していた。しかし、そういう人間はどこの会社にも少なからずいる。特に新卒採用ともなれば当たり前にあることで、しかも寺田は、会社が経営する老人ホームの土地を提供してくれた地主の身内だ。営業部には悪いが、しばらく様子をみてくれと上から言われ続けていたという。
「今回の件は社長の逆鱗に触れて、上からも厳重注意を受けてね。でも、それはおかしいだろ。そもそも寺田くんがそういうミスをしかねない人間だと分かっていて、こちらに押しつけて見て見ぬふりをしてきたのは上の連中なんだから。営業部を責めるのはお門違いだと訴えたんだ」
部長は語気を強めて言った。
「昨日のうちに、上から地主さんに事情を伝えてもらってね。地主さんは、そんなに会社に迷惑をかけていたのかって驚いておられたそうだ。辞めさせるなり何なり会社の好きなようにしてくれって」
そこまで話すと、部長はそばの自販機に寄りかかってひと息つき、みのりに笑いかけた。
「細川さんにも苦労をかけたね。いろいろ大変だったろう。申し訳なかった。これからは自分の仕事に専念して精進してほしい。君の働きぶりは、僕がいちばん分かっているから」
部長はポケットから小銭入れを取り出すと、コーヒー飲むかい？ 細川さんは確かブラックだったね、とつぶやいて自販機でブラックコーヒーを二本買い、一本をみのりに手渡した。いただきます、と受け取る缶のぬくもりが両手を包んだ。
オフィスに戻ると、いつもどおりの朝だった。あちこちの机で電話が鳴り響き、人々がせわしなく立ち働く。パソコンのキーボードを打つ音、コピー機や印刷の機械音、ＦＡＸの送信や受信の音……。
目が合った佐々木が、笑顔でウインクした。良かったね、これで肩の荷が下りるね、とその顔が語っている。寺田の姿は見えない。そばを通りがかった同僚が、人事部に

行っているらしいよ、と耳打ちしてきた。
午後になって寺田が姿を現した。部長の席に呼ばれてなにやら話をしていたが、みのりのところまでは聞こえない。声をかけてきたのは寺田の方だ。
「何？」と、つとめて明るく返事する。
すると寺田は、これ……と、小さな紙袋を渡してきた。中をのぞくと、おしゃれなデザインの小さい箱が入っている。
「チョコレートです。今までお世話になったお礼に」
よほどみのりが呆気にとられた顔をしていたのだろう。寺田は照れたように頭をかいた。こんな表情を見せるのか。今になって。
「そんな、お礼だなんて。私、何もしてないし。もらえないよ、こんなの」
やっとの思いで言葉をしぼり出すと、寺田は手を勢いよく左右に振った。
「いやいや、何もしてないなんて、そんなわけ、ないじゃないですか。いろいろ教えてもらったし、親切にしてもらったし。僕、めっちゃ感謝してます」
もう一度、紙袋をのぞく。手のひらサイズの真っ赤な箱に、黒のリボンが何重にもかけられ、一か所に寄せられた黒のリボンで大輪の花がかたどられている。
「なんか、すごく高級そうなチョコレート……」
みのりがつぶやくと、寺田が嬉しそうにうなずいた。
「今、ちょうどバレンタインの時期なんで。昨日デパ地下に行ったら、いろんな種類があって。その中から細川さんのイメージで選びました」
赤い箱に、複雑に絡み合う黒のリボン――寺田は自分に対してどんなイメージを抱いているのだろう。それを寺田にたずねることは決してない。
午後五時半の終業時間になるやいなや、みのりはパソコンの電源を落として席を立った。やり残した仕事はたくさんあるが、今日は一刻も早く帰りたい気分だ。エレベーターホールに向かうと佐々木が追いかけてきた。
「このあと時間ある？　寺田の退職を祝って飲みに行こうって話になったんだけど」
今日は彼氏の誕生日だから、と嘘がさらっと出る。「あら、それはごちそうさま」と、佐々木は肩をすくめ、「それなら良かった」とつぶやいた。
「細川さん、今朝から元気なかったから。寺田のせいでしょ？　一年近くも面倒を見た結果がこれだもん、ショックだよね。でも、あいつは自業自得だから。気にしちゃダメだよ」
みのりがうなずくと、佐々木もウンウンとうなずいて微笑んだ。
帰宅してさっそく夕食づくりに取りかかる。だるさが取れて体が軽い。今日は達也も早番で七時には帰ってくるし、久しぶりに私が料理を作ろう。ここ一週間、体調の優れないみのりに代わって、達也が食事づくりを担当した。仕事で朝から晩まで厨房に立つ達也に家に帰ってまで、と申し訳ない気がするが、生理中はどうしようもない。

出来合いの惣菜で済ましてもいいのだが、栄養のあるものを食べなきゃ、と手料理にこだわる達也に甘えさせてもらっている。
達也はみのりの料理を何でもおいしいと食べてくれるが、なかでもお気に入りは鴨肉の赤ワイン煮だった。これは時間さえかければ、おいしく簡単に作れるメニューだ。
仕事帰りにスーパーで買ってきた鴨肉の塊をまな板の上に置く。フォークを突き刺して所々に穴をあけ、深鍋にたっぷりのオリーブオイルを熱し、鴨肉の表面にまんべんなく焼き目をつけたら、赤ワインをひたひたに注ぐ。水はいっさい使わない代わりに赤ワインをふんだんに使うが、ここは惜しんではいけない。あとは弱火でじっくり一時間ほど煮込むだけだ。
鍋を弱火にかけたところで達也が帰ってきた。
「お、いい匂い。鴨肉か、いいね」
鍋のふたを開けて、達也が破顔した。まただ。この顔。今日、何度も目の当りにした屈託のない表情。
鴨肉が出来上がる時間に合わせてパスタをゆで、サラダも作ることにしよう。酒の肴は冷蔵庫に常備しているから、食べる時に出すだけでいい。食後のデザートは……と考えていた時だった。
「来週さ、親に会ってほしいんだ」
とっさに意味が分からなかった。みのりの顔を見て、達也がもう一度くり返す。
「来週の日曜、親に会ってくれないか」
「それって……」
みのりが言いかけると、達也が真剣な顔でうなずく。
「店をね、任されそうなんだ」
「店？」
「今度、近くに姉妹店を出すから、そこの店長を任せたいって」
「そうなんだ。おめでとう」
「やっと、一か所の店に腰を落ちつけて、自分の作りたいものを作れる状況になった。その分、プレッシャーも半端ないけど」
「うん」
「いろんな店で勉強させてもらったけど、今の店の味がいちばん好きで。もう少し修業してからとも思ったけど、せっかくのチャンスだし」
「うん。そうだよ、チャンスだよ。――新しい店って、どんな料理を出すの？」
「和食の創作料理。明日、返事して正式に決まる。そしたら結婚してほしい」
「うん」
会話の流れで思わずＯＫしていた。とたんに達也が両手を広げて抱きついてくる。
「ちょっと、ちょっと。危ないってば。包丁……」

包丁をまな板の上に置き、達也の背中に両手を回す。すると、よりきつく達也に抱きしめられた。大きくて骨ばった手。かつてのサラリーマンの手ではない。

これからどうなるのだろう。お店はうまく行くだろうか。両親にも達也の本当の職業を伝えなければならない。母親が彼の年収を聞いたりしなければいいけれど。

今、私が仕事を辞めるわけにはいかない。目を閉じると寺田の顔が浮かんだ。すぐに目を開ける。

達也の肩越しに大きな紙袋が目に入った。先日、同僚からもらったブランド物のジャケットだ。昼休みにオフィスで何人かの同僚と話していて、そのうちの一人が「誰か、もらってくれないかな」と言って、机の下から取り出して広げてみせたのだった。

「奮発して買ったはいいけど、一回も着ないうちに太っちゃって」

「これは私も無理。着なくても分かる。絶対、腕が通らない」

「細川さんだったら似合うんじゃない？　細いし、スタイルいいし」

名前のとおりね、と誰かが言い、その場にいた女性たちが笑った。寺田も笑った。

パソコン画面を真剣に見つめていた（大方、芸能ニュースでもチェックしていたのだろう）寺田が、あの時、ふっと笑みを漏らしたのだ。あんなふうに笑うことが、今までもあったのだろう、きっと。こちらが気づかなかっただけで。

でも、もう終わったことだ。つま先立ちになって達也の首にしがみつく。

来週、彼の両親に会いに行く時にこのジャケットを着て行こう。もらい物の服を着ていくなんて失礼だろうか。でも、これから結婚の準備にお金がかかるし、結婚してからも節約に励まなければならない。

試着してみると、あつらえたようにぴったりだった。達也も、おおっと感嘆の声をあげる。細身のシルエットが体のラインを際立たせ、それでいて上品な印象を与える。生地も上質で、なめらかな手ざわりだ。これはいい。

ふと、両肩に細かなほこりがかぶっているのに気づいた。

そういえば、ずいぶん前に買ったきり放置していたと言っていた。ジャケットの内側の洗濯表示を見ると、手洗い可となっている。鴨肉のワイン煮が完成するまで時間はまだある。

ユニットバスにぬるま湯をはり、中性洗剤をほんの少し溶かしてジャケットを静かに浸（ひた）す。するとたちまち湯が土気色に染まった。ジャケットから流れ出したのだ。黒色の服から茶色の水。いったい何の色だろう？

靴下を脱ぎ、浴槽に入って踏み洗いをする。ますます茶色の水が流れ出し、湯が濁ってジャケットが見えなくなった。ならば流水ですすごうと思い、風呂の栓を抜き、ジャケットに直接シャワーをかける。茶色の水が勢いよく流れ出す。服の色が落ちてしまうのではないかと心配したが、ジャケットは漆黒の色を保っている。

鍋、そのままでいいの？　と達也の声がした。うん、吹きこぼれないようにだけ見て

いて。シャワーの音にかき消されないよう声をはり上げる。
どうかした？　大丈夫か？　大丈夫、大丈夫、ジャケットを洗っているだけだから。
話しながらも、洗う手を休めることはない。ジャケットからは茶色の水が流れ続ける。いっこうに止まる気配がなかった。